

徒然草

アルゼンチンと大来さん

小浜裕久
静岡県立大学名誉教授

これをお読みになっている方々は、それなりに大来さんとの個人的思い出をお持ちのことと思う。でも、一緒に昼寝したことがある人は少ないのだろうか。

1990年9月のアルゼンチン・オオキタ財団主催「アルゼンチン経済復興のための大来セミナー」の後だったと思う。せっかく大来夫妻が来てくれたからとギジェルモ・アルチュロン・オオキタ財団会長が、海軍のヨットでティグレ観光（アルゼンチンの水郷）をアレンジしてくれた。ヨットと言っても立派な船で20人くらいが着席してフランス料理の昼食を食べた。大変暖かい午後で、ギジェルモが「くつろいで下さい」と言うので、人の言うことを真に受ける小浜さんはデッキで昼寝を始めた。すると夢うつつに「あっ小浜君寝てる。僕も寝よう」と大来さんもデッキで昼寝を始めた。

30年前、「アルゼンチン経済開発調査」という大きな仕事があった。1985年8月から始まったマクロ経済分析を含む最初の開発調査で、1987年1月にアルフォンシン大統領に最終レポートを提出した。

一番多いときで、40人の専門家が一月二月単位で滞在して調査が実施された。調査団が最初にブエノスアイレスに入ったのは、1985年8月末。調査団が一月二月滞在しても大来さんが来るのは2、3日。副総括は結構大変だった。アルゼンチン経済開発調査（1985年～1987年）の報告書（本報告書は英語。その他スペイン語版、日本語版も作成。箱入りで、片手で長く持つのは結構大変な重さだった）。「Okita Report（大来・レポート）」「インフォルメ・オオキタ」として、アルゼンチンでは結構人口に膾炙し、ブエノスアイレスで何回か「アルゼンチン経済をどうするか：インフォルメ・オオキタの教訓」といったセミナーが開かれたが、アルゼンチンの経済社会を大きく変えるほどの影響力は、残念ながら見られなかった。

この調査をきっかけにギジェルモ・アルチュロン農牧協会会長が音頭を取って、ブエノスアイレスにオオキタ財団が設立された。大来さんも生前よく「ブエノスアイレスに僕の名前がついた財団があるんだよ」と話していた。

30年前、この調査の頃、ブエノスアイレスの街を歩くと、「かつて先進国だったんだなあ」という印象だった。ブエノスアイレス中心の銀行街も重厚な建物だらけだったが、インフラのメインテナンスはひどいもんだった。アルゼンチン経済開発調査をやっていた頃（1980年代半ば）はまだ、古い銀行には木で出来たエスカレーターが現役で動いていた。今も木のエスカレーターは、あるかも知れない。

アルゼンチン経済開発調査が始まったのは、1985年、マクロ経済政策の要は、「ハイパーインフレをどうするか」ということで、1985年6月には「アウストラル・プラン」というヘテロドックス政策が発表されていた。

IMFは、1984年末のコンディショナリティ（緊縮財政など）を守らないとクレーム。1985年3月にスタンドバイ融資をサスペンド。5月には緊縮政策に反対するゼネストで20万人がカーサ・ロサーダ（大統領官邸）を取り巻いた。1985年6月14日、スルイール経済大臣は旧ペソを新通貨アウストラルに切り替え、千倍のデノミ（ゼロを3つとる）、物価・公共料金の凍結、公務員賃金に対する物価スライド制の廃止（事実上の賃下げ）などを内容とする「アウストラル・プラン」を発表した。

今はともかく、1980年代のラテンアメリカでは、インフレ率は「monthly rate of inflation」で表現していた。月15%のインフレは、年率に換算すると195.6%になる。1989年に入るとインフレは昂進し、1989年7月のインフレは年率3000%を超えた。各地で暴動が起こり、アルフォンシン大統領は7月8日、任期を155日残して大統領職を投げだし、次期大統領選に勝っていたメネンが、7月10日に大統領に就任したのである。1989年9月にはいると、インフレ率が「weekly rate of inflation」で表現されるほどであった。

ハイパーインフレは、物価凍結令なんかで抑えようとしても無理。経済運営を効率化して財政赤字を計画的に減らしていかななくてはならない。

最後に大来さんと会ったのは亡くなる2週間くらい前の1993年1月末、富国生命ビル13階の大来事務所で通産省の田村修二さんと一緒だった。1993年7月に田村さんとブエノスアイレスに話しに行った。その時だと思うけど、朝ぼけていてパスポートを持たずにパラグアイとの国境を越えた、

「アルゼンチン経済開発調査」ではいろんな事を学んだ、「いいこと」も「理不尽なこと」も。サイモン・クズネッツは、世界には4つの国があると言ったと伝えられている。それは、先進国、低開発国、日本とアルゼンチン。少なくともアルゼンチンが特異な国だということは実感した。

大来さんというと、多くの人があの温顔を思い出す。吉田茂に辞表を叩き付けた熱い心は、あの大きなお腹に押し込んでいたのだろうか。昭和20年8月16日に「戦後復興のための会議」をコーディネートしたのも大来さんだ。